

新潟県立看護短期大学での老年看護学教育の実践を振り返って

著者	水戸 美津子
雑誌名	新潟県立看護短期大学紀要
巻	9
ページ	59-60
発行年	2004-03
URL	http://hdl.handle.net/10631/576

新潟県立看護短期大学での老年看護学教育の実践を振り返って

水戸 美津子

1. はじめに

私は短期大学が開学して2年目から老年看護学担当助教授として3年間在職しました。この原稿のために短大時代の講義ノート、学生の講義の評価・感想文（毎回の講義終了後に書いてもらっていた）、短大を辞める時にプレゼントされた学生達からの一人一人の写真付きメッセージカード集、そしてある一人の卒業生から借りた私の講義ノート、様々な場面の写真などを改めて見る機会を得ました。なつかしく、そして、よいことしか思い出さないのは年齢のせいかもしれません。

閉校にあたって何を書こうかと迷いました。単なる思い出集にはしたくないとの杉田教授のメールを読みながら、たくさんの方が思い出されてうまく整理ができませんでした。私の人生にとって新潟県立看護短期大学での仕事はどんな意味を持っているのだろうか、締め切りを過ぎてでも自問自答していました。

結局、10年間の短大の歴史の一時期に私自身ができるように考えながら教育したのかをまとめることで、新潟県立看護短期大学の教育実践の軌跡をいささかでも鮮明にすることに寄与できるかもしれないと思い、私の専門である老年看護学の教育実践を中心に書かせていただこうと思いました。

2. 学生に伝えたかった老年看護学の深さと面白さ

私は老年看護学を看護基礎教育カリキュラムに新設された平成2年から担当しました。当時は、よい教科書・参考書もなく関連領域の老年学の本も多不多的時代でした。新しい専門分野を担当する者として猛烈に勉強しました。それだけに、老年看護学に対する思い入れは人に負けないと自負しております。短大の看護学科では「老人看護学概論・保健」「老人臨床看護学」「老人看護学実習」を、専攻科（地域看護学）では「地域老人保健論」を担当しました。当時、老年看護学分野は助教授の私と助手1名でした。教授がいませんでしたので、科目責任者としての仕事もしました。老年看護学の授業は“常に新しい情報や知見に基づいた内容にすること”“できるだけ事例を提示する”

“演習を重視する”“体験してもらう”“関連の本を多く提示する”ということを中心に構成しました。90年代は高齢者に関する医療・福祉などが大きく変化し、それに伴い看護教育や制度、研究なども飛躍的な変貌をとげた時期でした。それゆえに、常に新しい情報を学生達には伝えたいと思っていました。東京から遠く離れていても学生には、できるだけ新しいものを、と思っていました。

また、老年期は学生達にとっては一番イメージしにくいライフステージであるため、学内では事例を提示した授業展開や演習での疑似体験などを取り入れたりしました。さらには学外での体験学習として、夏休みに「夏休みのボランティア体験—課題レポート」を出しました。夏休み中に、高齢者福祉施設や地域のお年寄りの活動場所に参加して、そこで学んだことをレポートするという課題です。特別養護老人ホーム、デイサービスセンター、老人保健施設などの高齢者の様々な施設で、長い学生は2週間もボランティアに行きレポートを書いてきました。新鮮な目で、様々なことを見て、そしていろんなことを考えていた学生達でした。最後の授業の感想文には「前期、後期の講義を受けた中で一番良かったこと（印象に残っている）は、夏休みのボランティアだった。講義を受けただけではなかなかわからない現実を“夏休みの課題”という形で、レポート提出することによって、実際に体験する機会を与えていただき——」というように、ボランティア体験は、講義の内容をさらに深めるものになったようでした。また、“高齢者にインタビュー”をするという課題も出しました。これは、老年看護の対象の理解を深めることをねらいとしたものです。それは、自分の祖父母、近所のお年寄りに生まれてから今までの生活史をインタビューしてくるというものです。授業時間中に学生の理解を得てそのうちのいくつかを発表してもらいました。ある学生が自分の祖母からの話を発表しながら、皆の前で、ほろほろ泣きだしたことがありました。その学生は自分の同居している祖母の結婚した相手が3日後に戦地に行き、そのまま帰ってこなかったこと、それを不憫に思った親戚がその弟

と結婚させたこと、そしてそれが、今の自分の祖父と祖母であることを、初めて聞いたと話しました。いつもにこにこしているおばあちゃんに、そんな大変な悲しみがあつたことを今まで知らなかったと、ぼろぼろ泣くのです。いっしょに暮らしていたのに祖母の悲しみを、知らなかったことへの自分自身のなさげなさに泣いているようでした。それを、他の学生達が見て、がんばれ、がんばれ、と励ましたのです。その学生は最後まで報告を終えることができました。私は、学生達のボランティア体験や高齢者へのインタビュー体験を聞いて、その真面目さと素朴さに心から感動しました。首都圏の短大から着任した私には感動でした。そしてこのような体験を通して、学生達は看護の対象である高齢者を多面的に多様に理解してくれたのだろうと思っています。今、この原稿を書きながら、あの日の学生の体験報告が鮮明に蘇ってきています。多くの学生達は、講義終了時に老年看護の授業で「老人が好きになった」と書いており、私は大変うれしく、そして誇りに思っています。

私は、老年期のイメージは決して明るいものではなく、だからこそ、未来を担う学生達には多様な見方を得て卒業して行ってほしいと思っていました。そのため授業にはとても力を注いでいたと思います。そして、それを可能にする条件が、新潟にはあったと今、しみじみ思います。この原稿を書きながら、あの学生達はどんなところでどんな看護をしているだろうかと考えています。

3. 輪読会の試み

私は、老年看護は多様な見方ができる人、自由な発想ができる人でなければ看護はできないと思っています。しかし、それを授業という限られた時間のなかで育てていくのは時間がかかります。そこで、授業の中では卒業までに読んでほしい本を提示しました。それらの本の中には看護学以外の本も沢山ありました。その中の2冊山崎章郎「病院で死ぬということ」(主婦の友社)、波平恵美子「病むことの文化」(海鳴社)を、学生が読みたいと申し出てきました。そこで助手も加わり輪読会をしました。学生も私たちも忙しく長続きはしませんでした。学生の読み方と若い助手の読み方、私の読み方を擦り合わせて議論するのは、楽しい時間でした。もちろん、そこから看護を違う角度からみることで様々な発見がありました。これは、もっと続けたかったことでした。

4. 快適住まい環境研究会の立ち上げと課外での学生との交流

平成8年に看護短大の教員有志が中心となり立ち上げた快適住まい環境研究会に最初から参加しました。この研究会は、住まい環境を中心にあらゆる人々が健やかに生き、そして健やかに老いるための準備と支援のための一助となる活動を現在も続けております。そして、この研究会に学生部ができ、課外での様々な活動を通して授業の中ではみることのできない学生達の姿に接することができました。たくましく、素直で、やさしく、そして美しい学生達でした。なにより、バイタリティにあふれ、学園祭では素晴らしい活動を見せてくれました。私は、現在も幹事に名を連ねさせていただいておりますが、実質的には参加できず残念な思いをしています。

5. おわりに

原稿を書きながら、学生達、事務の方達、清掃のおばさんたち、食堂のおばさんたち、警備のおじさんたちの顔が去来しました。素敵な人たちとの出会いがありました。

そして、私にとってなによりも忘れられない人は桑野タイ子学科長です。自由な発想で、私には思いもしない発想をし、こうと決めたら頑として動かない桑野先生に触発されること、教えられることがたくさんありました。やさしくてそしてとても厳しい先生でした。桑野先生には、本当に多くのことを教えていただきました。

最後に、自然の豊かさから受けた感動を書き留めておこうと思います。高田公園の春の桜や紅葉を見ながら通勤し、その美しさに道路に車を止め、しばし眺めていたことがあります。また、老年看護実習の場所に通う途中、頸城平野に萌黄色の絨毯が波打つような稲に感動しながら“なんて美しいだろう……”と車から降りて、誰も通らない農道にしばし佇んでいたこともありました。さらには短大の駐車場から見える雪景色の雄大な妙高山に感動し、しばし呆然と見上げていて他の先生に呼び止められたこともありました。本当に美しい景色の数々、たぶん、一生忘れることのできない風景だろうと思います。

閉校にあたり、このような原稿を書く機会をいただき心から感謝申し上げます。そして、ここに在職したことを誇りに思います。ありがとうございました。

(山梨県立看護大学教授)